貝塚市埋蔵文化財調査報告 第51集

沢 城 跡 発 掘 調 査 概 要

1999.3.31

貝塚市教育委員会

沢城跡発掘調査概要

1999.3.31

貝塚市教育委員会

はじめに

本市に所在する沢城跡は沢の海浜部にあたります。近くには二色の浜海水浴場があり、春には 潮干狩り、夏には海水浴で賑わいます。地域の特産品として近木櫛があげられます。古くから櫛 の神として崇められてきた八品神社があり、平安時代に藤原明衡が著した『新猿楽記』に「和泉 櫛」として紹介されています。また古来より大阪から和歌山に至る交通ルートとして栄えた紀州 街道が通っており、寺院や文化財が数多く残されています。

沢城跡周辺は国道・鉄道の交通網が整備されており、近年、宅地化が進み、宅地造成によって 発掘調査を数多く行ってきました。

これらの成果は本地域の歴史を明らかにするうえでまことに有意義なことと考えています。

本調査報告書の刊行が、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご協力を頂き、ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも本市における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

貝塚市教育委員会 教育長 福 井 昱 彦

例 言

- 1. 本書は、株式会社大京の依頼により、大阪府貝塚市浦田71-1他に所在する沢城跡において 実施した共同住宅建設に伴う事前発掘調査の概要報告である。
- 2. 調査は確認調査を平成 10 年 8 月 27 日、本格的発掘調査を平成 10 年 10 月 19 日より平成 11 年 1 月13日にかけて実施した。なお内業調査については本書刊行をもって終了した。
- 3. 調査にあたっては、株式会社大京より多大なご理解とご協力を得た。記して感謝の意を表す。
- 4. 発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、吏員木嶋崇晴が担当した。 現地・内業調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

西出安芸子 大鹿倫子 藪知子 田中明美

- 5. 本書の執行編集は木嶋が行った。
- 6. 遺物写真撮影は木嶋が行った。
- 7. 出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目 次

は	۱.	z	1-
14	し	ניט	4

例	言		
第	1 章	調査に至る経過	1
第	2 章	位置と環境	3
第	3 章	調査成果	5
	1. 調	査の概要	5
	2. 基	本層序	5
	3. 検	出遺構	6
	(1) 第	1 遺構面	6
	鋤溝		6
	(2) 第	2 遺構面	6
	鋤溝		6
	SD	— 214 ······	6
	SX	− 213 ·····	6
	鋤溝		6
	SD	— 201 ·····	13
	SD	— 208 ·····	13
	SD	— 204 ·····	13
	SX	— 202 ·····	13
	SD	— 202 ·····	13
	SD	— 205 ·····	13
	SX	— 203 ·····	13
	牛の	足跡	13
	SX	— 206 ····	15
	(3) 第	3 遺構面	15
	SD	— 301 ·····	15
	4. 出	土遺物	15
第	4 章	まとめ	18

図版目次

図版1 検出遺構

調査区全景

図版 2 検出遺構

1. 第1遺構面全景

2. 鋤溝検出状況

図版3 検出遺構

1. SX - 203 検出状況

2. 同上 完掘状况

図版 4 検出遺構

1. 鋤溝、SD-214、SX-213 検出状況

2. 同上 完掘状況

図版 5 検出遺構

1. 第2遺構面全景

2. SX-202 検出状況

図版 6 検出遺構

1. SD-201 • 202 • 205 • 208 検出状況

2. 同上 完掘状況

図版7 検出遺構

1. SD-201 • 202 • 205 • 208 検出状況

2. 同上 完掘状况

図版 8 検出遺構

1. SD-201 • 208 検出状況

2. 同上 完掘状況

図版9 検出遺構

1. SD-202 検出状況

2. 同上 完掘状況

図版10 検出遺構

1. SD - 205 検出状況

2. 同上 完掘状况

図版11 検出遺構

1. SD − 301 完掘状況

2. 同上

図版12 出土遺物

 $SD - 202 (1, 26 \sim 28),$

SX - 202 (25), SX - 203 (31)

図版13 出土遺物

第2層(2)、第3層(4、6、9、10、

12、13)、第4層(5、14、15)。

図版14 出土遺物

第3層(7)、第4層(16~18、20、

29、30)、第5層(23、24)

挿 図 目 次

図1 貝塚市位置図

図2 貝塚市遺跡分布図

図3 調査地位置図

図4 調査区地区割図

図5 調査区西壁断面図・SD-201断

面図

図6 調査区中央セクション断面図

図7 第1遺構面遺構配置図

図8 第2遺構面遺構配置図

図9 第3遺構面遺構配置図

図10 出土遺物

第 1 章 調査に至る経過

平成10年3月17日、土地所有者より貝塚市浦田71—1他における共同住宅建設工事に際して、 埋蔵文化財届出書が提出された。当該地は周知の遺跡である沢城跡の範囲内にあたり、中世の城 跡、遺物包含層が存在することが予想されている。周辺での発掘調査では奈良~中世の掘立柱建 物、溝などが検出されている。

したがって貝塚市教育委員会は土地主体者である株式会社大京と協議を開始し、既設建物解体 後に試掘調査を行うことで合意した。

諸事情から建物未解体のまま、平成10年8月27日に試掘調査を実施することとなった。試掘調査は当該地に2箇所のトレンチを設定した。調査の結果、遺物包含層のほか、鋤溝、溝などの遺構が存在することが明らかとなった。

本市はこの試掘調査の成果から埋蔵文化財の取り扱いについて当該地での発掘調査が必要であると回答した。平成10年9月22日に調査計画書を回答し、株式会社大京と協議を行い、建物解体後に建設工事によって破壊される875㎡について発掘調査を実施することで合意した、平成10年10月19日に覚書を交わした。

調査期間は平成10年10月19日から平成11年1月13日である。

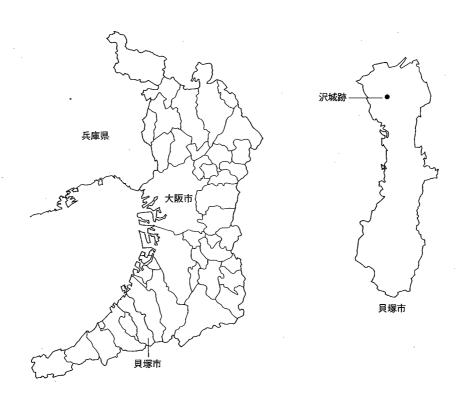


図1. 貝塚市位置図



1.沢新出遺跡 2.沢海岸遺跡 3.沢遺跡 5.長楽寺跡 7.丸山古墳 8.地蔵堂廃寺 10. 秦廃寺跡 19.泉州麻生塩壺出土地 20.堀遺跡 21.橋本遺跡 22.貝塚寺内町遺跡 23.加治・神前・畠中遺跡 24.明楽寺跡 25.沢共同墓地遺跡 26.沢西出遺跡 27.沢海岸北遺跡 28.沢城跡 29.新井・鳥羽遺跡 30.新井ノ池遺跡 31.半田遺跡 34.澱池遺跡 35.積善寺城跡 51.窪田遺跡・窪田廃寺 57.堤遺跡 58.小瀬五所山遺跡 59.石才遺跡 60.王子遺跡 61.土生遺跡 66.脇浜遺跡 67.今池遺跡 72. 地蔵堂遺跡 75.新井・鳥羽北遺跡 76.願泉寺本堂 77.道教寺銅鐘 78.沢西遺跡 79.王子西遺跡 80.津田遺跡 82.福田遺跡 87.小瀬遺跡 88.堤三宅遺跡 89.沢新開遺跡 90.沢タナジリ遺跡 91.堀新遺跡 93.麻生中下代遺跡 94.堀秋毛遺跡 95.半田北遺跡 96.沢老ノ塚遺跡 97.東遺跡 102.津田北遺跡 103.久保遺跡 110.海塚遺跡 111.脇浜川端遺跡

図2. 貝塚市遺跡分布図

第2章位置と環境

沢城跡は貝塚市沢に所在する。北は近木川、南は見出川に挟まれた中位段丘に立地する。調査地は大阪—和歌山を結ぶ国道26号線の東側に位置する。国道沿いという立地から大型店舗が目立つ。東には南海電鉄二色の浜駅があり、付近には店舗、住宅が集まっている。調査区は共同住宅跡地である。

本遺跡は中世・戦国時代の城跡・集落跡として推定されている。沢城は紀州根来勢によって畠中城・積善寺城とともに近木川流域に築かれた城である。紀州街道の西側に本丸があり、街道の東西にわたって集落を取込んだ堀をめぐらしていたと考えられている。天正13年(1585)の豊臣秀吉の根来攻めには、紀州の一向宗門徒で主として雑賀勢6千人が立て籠もった。城は中川秀政、高山右近らの軍勢に攻められたが、ト半斉了珍の仲介によって和談開城した。

周辺の遺跡としては、東は弥生 ~ 室町時代の散布地・寺院跡である窪田遺跡・窪田廃寺がある。飛鳥時代の幅2~4m、深さ0.7mの溝、鎌倉時代の掘立柱建物(3間×3間)、柱穴群、井戸を検出した。奈良~室町時代の集落跡である澱池遺跡がある。飛鳥~奈良時代の遺物が出土した。梁間4間、桁行6間の掘立柱建物を検出、時期は12世紀後半から13世紀にかけてと推測される。南は奈良~平安時代の散布地である沢海岸北遺跡がある。中世の集落跡である沢老ノ塚遺跡では中世以前の柱穴、中世の溝、鋤溝を検出した。弥生~奈良時代・中世・近世の集落跡・散布

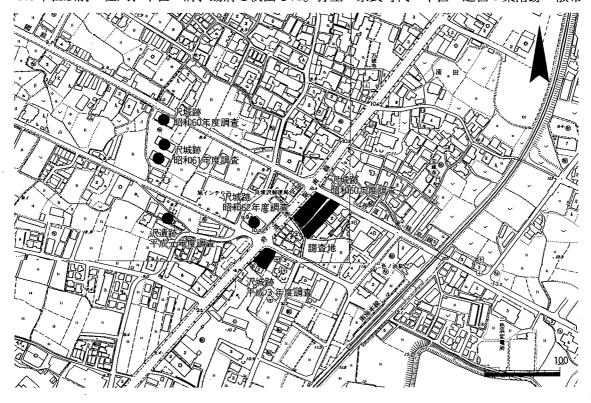


図3. 調査地位置図

地である沢遺跡があり、弥生第 I 様式新段階の土器が出土した。 8 世紀後半の柵に区画された掘立柱建物跡を検出した。明楽寺跡は平安時代の寺院跡と推定されている。菩薩文軒丸瓦、梵字文軒丸瓦が出土した。最近の調査では中世・近世の耕作地跡を検出した。沢西遺跡はスクレイパーなどの石器類が出土した。遺構は平安時代・中世の溝、鋤溝を検出した。中世の溝、鋤溝は調査区全体にひろがる。集落に関連するような遺構は認められなかったが、包含層で青磁、白磁を含む13~14世紀の遺物が出土した。近世の遺構は溝、粘土採掘土坑を検出した。しかし大きく削平をうけているため、遺構のひろがりは確認できなかった。

西は中世・近世の集落跡である沢新開遺跡、中世の集落跡である沢タナジリ遺跡、古墳~江戸時代の散布地である沢西出遺跡がある。古墳~室町時代の散布地である沢共同墓地跡は室町時代の瓦、蔵骨器が多数出土する。古墳時代前期~中期前半の製塩土器が多数出土した。中世・近世の墓地周辺は耕作地が広がっていた。

第 3 章 調 査 成 果

1. 調査の概要

調査は建設計画に基づき北東一南西約48m・西北一東南約19m、面積875mを調査区として設定した。調査区は国家座標基準値X=-173.920・Y=-60.010を基準にして 5 $m \times 5$ m に区画し、西に11区を設け(A \sim K)、南に10区を設けた($1\sim$ 10)。調査地は共同住宅跡地であり、基礎、便槽等の攪乱をうけていたが、その他の部分では遺物包含層が残っていた。第3層はD-6・7、 $E-3\sim7$ 、 $F-3\sim5$ 、G-4・5区に限られていたが、第4・5層は調査区全体(攪乱部分を除く)で検出した。

2. 基本層序

基本層序は第1層が盛土・現代耕作土(層厚約0.3m)、第2層はにぶい黄色砂質土(層厚約0.1 m)、第3層は灰黄色粘質土(層厚約0.1m)、第4層は黄灰色粘質土(層厚約0.1m)、第5層は黄灰色粘質土・第4層より粘質がつよい(層厚約0.1m)を測る。第6層はにぶい黄色粘土(地山)である。調査は第6層上面まで行った。当初は基本層序を第1~7層としていたが、第6層としていたものを整理段階で遺構(SX - 202・203)とした。したがって、地山である第7層を第6層とした。第3層上面(第1遺構面)、第6層上面(第2遺構面)で遺構面を検出した。

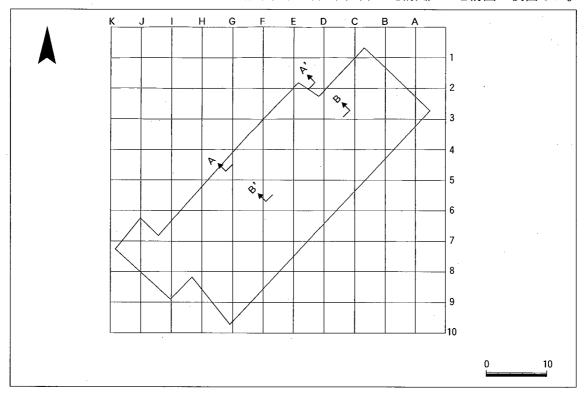


図4. 調査区地区割図

第3~5層は同質の堆積であり、遺構面として明確にとらえることができなかった。各層ごとに掘削作業を行い、第4・5層上面で検出作業を行ったが、明確な遺構は確認できなかった。

3. 検出遺構

第1遺構面では鋤溝、第2遺構面では鋤溝、溝、自然流路、第3遺構面で自然流路を検出した。 以下主な遺構について詳述する。

(1) 第1遺構面(図7)

第3層上面で検出を行った。調査区南から北方向に0.07~0.1m傾斜する。

鋤溝(図版2)

これらはD-2・3、E-3・7、F-3・4・6、G-4、H-5区で2種類の鋤溝を検出した。 北東方向は検出長0.5~3.2m、幅約0.15m、深さ約0.02mを測る。方向は座標北に対して東へ45。振る。埋土は黄灰色砂質土、灰黄色砂質土、灰色砂質土がある。それぞれ時期差をあらわしていると考えられる。遺物は土師器、瓦器が出土した。北西方向の鋤溝は検出長1.1~2.8m、幅約0.2m、深さ約0.04mを測る。方向は座標北に対して西へ45°振る。埋土は灰黄色砂質土である。遺物は土師器、瓦器が出土した。第1遺構面は出土遺物より中世後半の耕作地跡と考えられる。

(2) 第2遺構面(図8)

第6層上面で検出を行った。第2遺構面より鋤溝、溝などを検出した。

鋤溝

これらはB-3、C-3区で検出した鋤溝である。検出長 $0.5\sim2.8$ m、幅 $0.2\sim0.3$ m、深さ約0.2mを測る。方向は座標北に対して西 $\sim45^\circ$ 振る。埋土は黄灰色粘質土と灰色粘質土の2種類があり、それぞれ時期が異なると考えられる。埋土は第4層の堆積土に類似する。遺物は出土していない。

SD-214(図版4)

本遺構はB-3区で検出した溝である。検出長約4 m、幅 $0.2\sim0.5$ m、深さ0.1mを測る。方向は座標北に対して東へ30° 振る。埋土はにぶい灰黄褐色粘質土である。鋤溝と重複する。鋤溝よりも古い。本遺構はSD-201へ流れていたと考えられる。

SX - 213 (図版 4)

本遺構はB — 3区で検出した土坑である。直径約0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰色粘質土でにぶい黄橙色土がブロック状に混じる。遺物は出土していない。

鋤溝

これらはE-6、F-5 • 6、G-4 • 5 区で検出した鋤溝である。鋤溝は北東方向のものと北西方向のものを検出した。検出長 $1\sim 2.4$ m、幅約0.2 m、深さ0.03 mを測る。方向は座標北に対して東へ $30\sim40$ ° 振る。埋土は北東方向が黒褐色粘質土、北西方向が褐灰色土である。埋土の

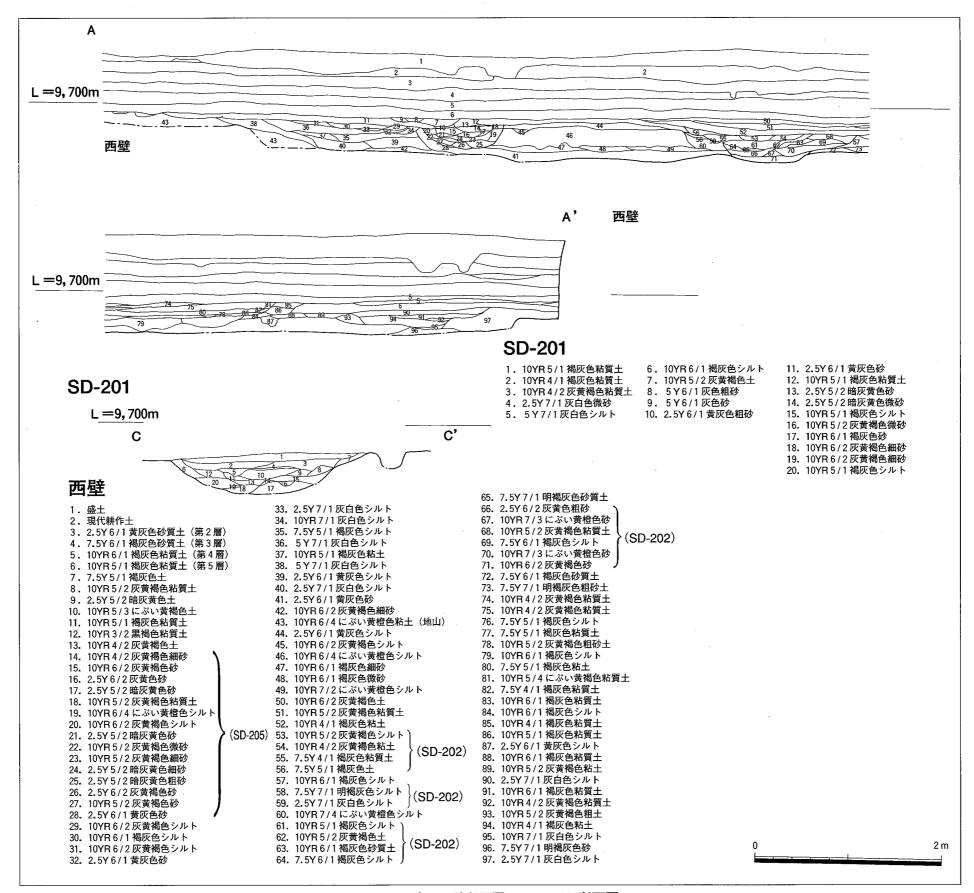


図 5. 調査区西壁断面図・SD-201断面図

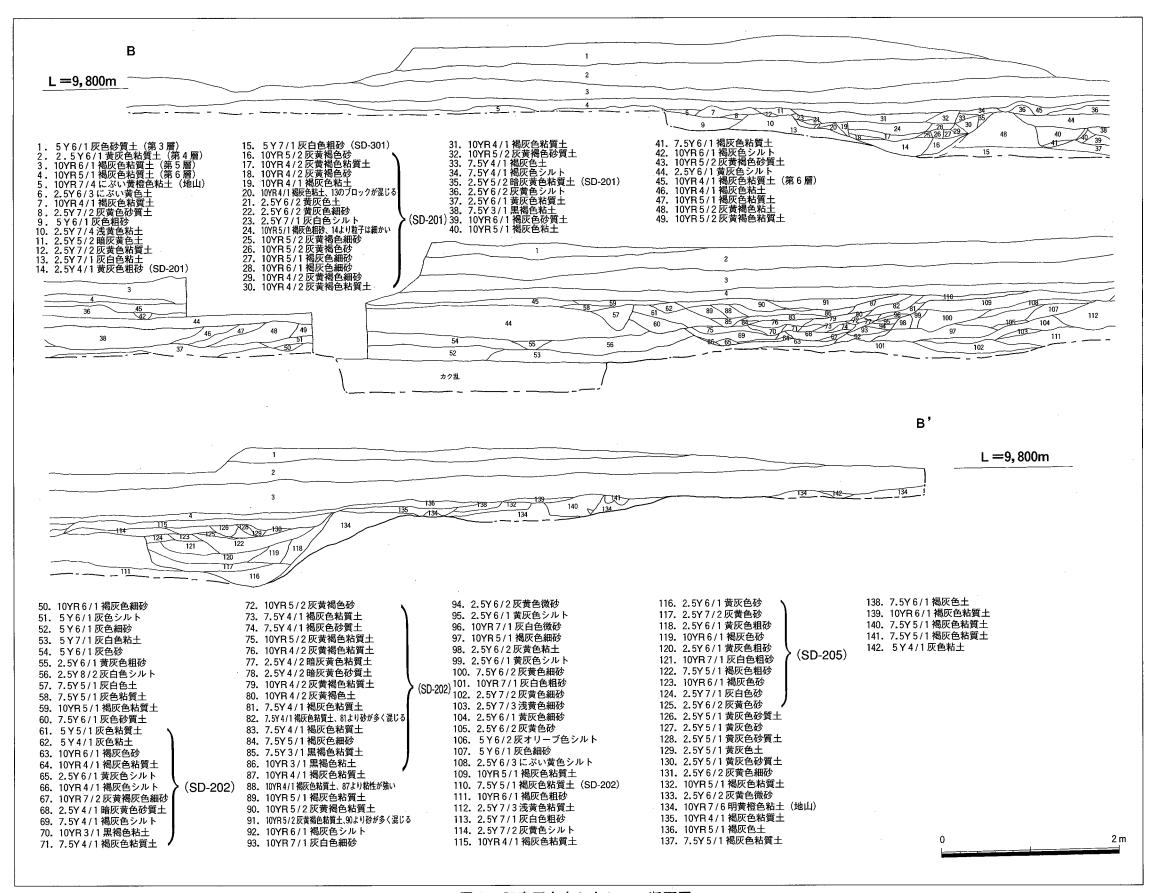


図 6. 調査区中央セクション断面図

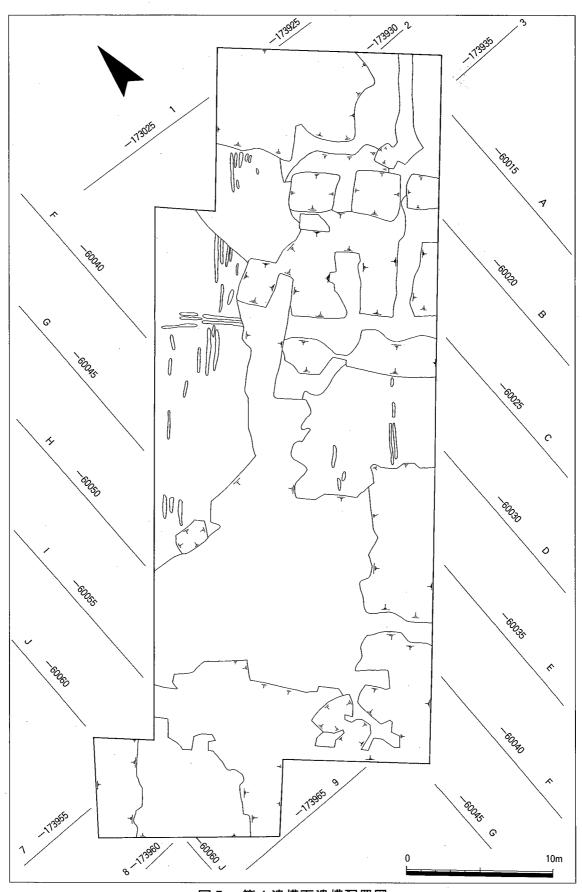


図7. 第1遺構面遺構配置図

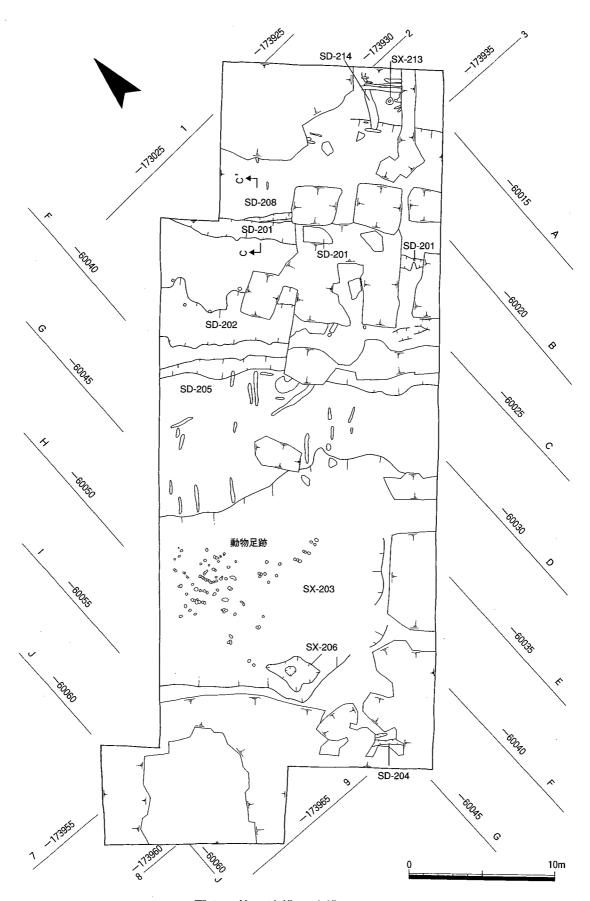


図8. 第2遺構面遺構配置図

色調は異なるが、質的に第5層の堆積土と類似する。流路が埋没した後に耕作地として利用されていた。

SD-201 (図版5·6、図版6·7·8)

本遺構はC-5、D-3、E-2・3区で検出した溝である。検出長約17m、幅約1m、深さ0.15mを測る。方向は座標北に対して西へ50°振る。埋土は上から順に褐灰色粘質土、褐灰色粗砂、灰黄褐色粘質土、黄灰色粗砂が堆積する。水流は流水と滞水を交互に繰り返したと考えられる。遺物は出土していない。本遺構はSD-208を切っている。

SD-208 (図版6 • 7 • 8)

本遺構はD-3区で検出した溝である。検出長約3m、幅約0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は 灰色粗砂である。方向は座標北に対して西へ50°振る。遺物は出土していない。

SD - 204

本遺構は $G \cdot H - 9$ 区で検出した溝である。検出長 2 m、幅0.3 m、深さ0.05 mを測る。方向は座標北に対して西 $\sim 50^\circ$ 振る。遺物は出土していない。

SX - 202 (図版 5)

本遺構はD-6、E $-3\sim6$ 、F-3・4区で検出した落ち込みである。当初は第6層としていた。検出長約18m、幅 $7\sim9.5$ m、深さ $0.1\sim0.2$ mを測る。遺物はサヌカイト製の石器が出土した(図10-25、図版12)。本遺構下よりSD-202・205を検出した。

SD-202 (図版5・6、図版6・7・9)

本遺構はE-4、F-3・4区で検出した自然流路である。検出長8.5m、幅2~4.5m、深さ0.26mを測る。方向は座標北に対して西へ50°振る。埋土は上・下層に分けられる。上層は灰黄褐色粘質土・粘土、下層は褐灰色砂が堆積する。遺物は粘質土層上部で土師器、底部で須恵器が出土した(図10-1、図版12)。本遺構は次第に水の流れが弱まり、その後滞水し、粘土が堆積したと考えられる。

SD - 205 (図5 ⋅ 6、図版6 ⋅ 7 ⋅ 10)

本遺構は $E \cdot F - 4$ 区で検出した溝である。検出長約8 m、幅1.2 m、深さ0.15 mを測る。方向は座標北に対して西へ50° 振る。埋土は上層が暗灰黄色砂、下層が灰黄色砂である。埋土に粘土が堆積しないことから、短期間のうちに埋没したと考えられる。本遺構はSD-202が半分埋まった時期に掘削される。SD-202が埋まる前に埋没したと考えられる。

SX — 203 (図版 3)

本遺構はE-7、 $F\sim H-6\sim 8$ 、I-6 • 7区で検出した落ち込みである。当初は第 6 層としていた。検出長約15 m、幅 $12\sim 15$ m、深さ約0.1 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土ににぶい黄褐色土がブロック状に混じる。遺物は石鏃が出土した(図版12-31)。本遺構より牛の足跡、S X-206 を検出した。

牛の足跡 (図版3)

これらは $G \cdot H - 6 \cdot 7$ 区を中心に検出した足跡である。直径 $0.1 \sim 0.3 m$ 、深さ0.03 mを測る。

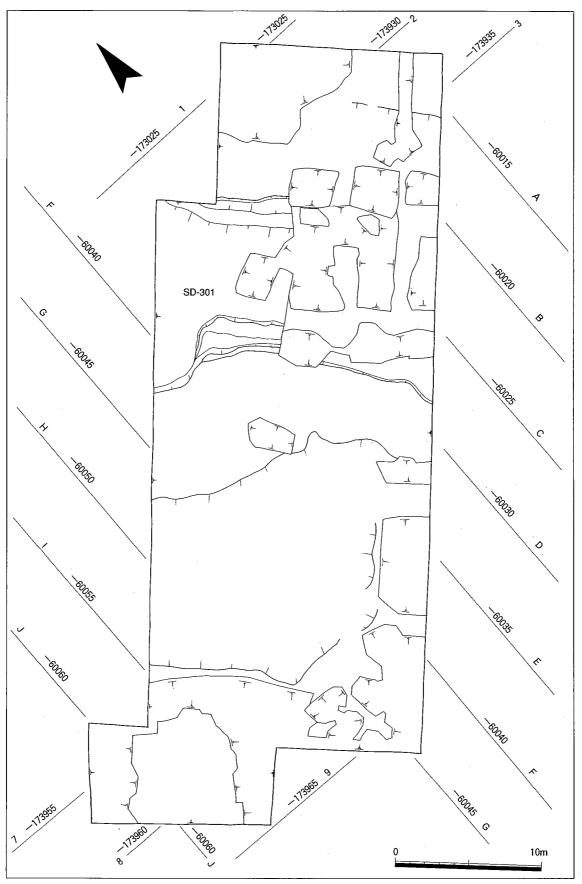


図9. 第3遺構面遺構配置図

あるため、時期差があると考えられる。足跡は調査区全体でみられた。

SX - 206

本遺構はH-8区で検出した土坑である。検出長は南北幅2.3m、東西幅3m、深さ約0.05mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土である。本遺構の底部で直径約0.5mの不整形土坑を検出した。埋土は灰白色シルトである。本遺構はSX-203の窪み部分と考えられる。

(3)第3遺構面(図9)

SD-201・202・205の下面に存在するSD-301を検出した。

SD-301(図版11)

本遺構はD-6、 $E-2\sim6$ 、 $F-3\cdot4$ 、G-4区で検出した自然流路である。検出長約18 m、幅 $10\sim12$ m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰白色シルトに黄灰色シルトが混じる。遺物は出土していない。

4. 出土遺物

SD-202、SX-202 • 203 出土遺物

1 はSD-202出土の土師器鉢である。復元口径16.6cmを測る。口縁部は内弯しながら外上方にのびる。口縁端部は外反させる。26は1と同一個体である。 $27 \cdot 28$ は須恵器壺体部である。25はSX-202出土のサヌカイト製石器である。長さ5.5cm、厚さ0.9cmを測る。31はSX-203出土のサヌカイト製石鏃である。長さ2.7cm、厚さ0.2cmを測る。

第2層出土遺物

2 は土師器皿である。復元口径8.0㎝、底部器厚0.5㎝を測る。底部を肥厚させ、口縁部は若干外反する。口縁端部は丸い。

3 は青磁鉢である。復元口径15.8cm、器厚0.6cmを測る。口縁端部は丸い。

第3層出土遺物

 $4\sim6$ は土師器皿であり、底部は平底、口縁部は短く外上方に屈曲する。 4 は復元口径8.2cm を測る。口縁端部は若干肥厚する。 5 は復元口径8.2cmを測る。口縁端部は丸い。 6 は復元口径6.0cmを測る。

7は瓦器椀である。復元口径15.8㎝を測る。内弯気味に外上方にのびる。

8・9は土師器甕である。8は復元口径25.4cm、器厚0.7cmを測る。口縁部は外反させ、端部は内側に屈曲させる。9は復元口径25.2cm、器厚0.8cmを測る。口縁部は内弯し、端部は外に屈曲させる。体部外面はつよい横ナデを施す。

10~12は須恵器鉢である。10は復元口径24.6cm、器厚0.9cmを測る。口縁端部は上下に拡張する。 11は復元口径22.8cm、器厚0.6cmを測る。12は復元口径23.2cm、器厚0.8cmを測る。口縁端部に沈 線を1条施す。

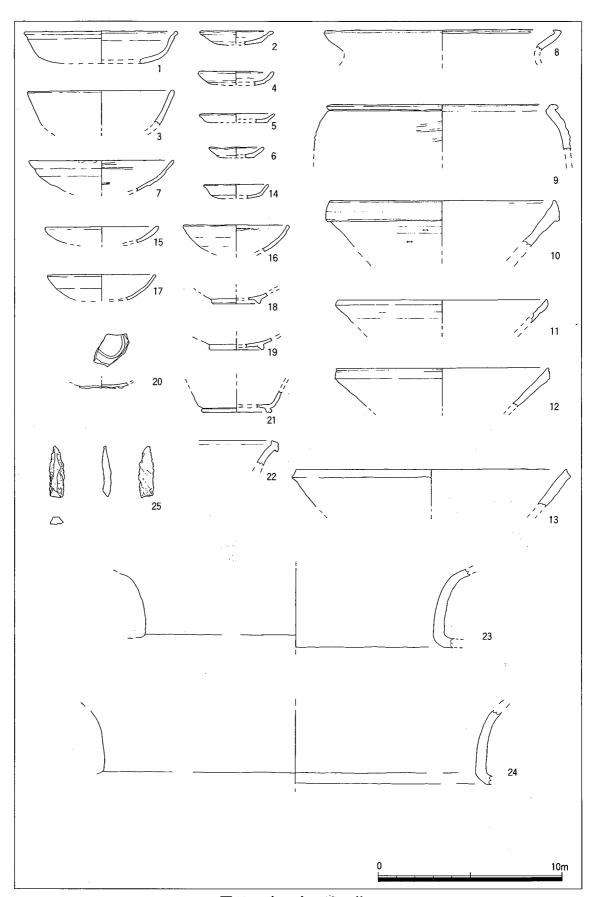


図10. 出 土 遺 物

13は瓦質鉢である。復元口径29.4㎝、器厚0.9㎝を測る。口縁端面は凹状にナデを施す。

第4層出土遺物

14・15は土師器皿である。14は復元口径7.4cmを測る。底部は平底であり、口縁部は短く外上方に屈曲し、端部は丸い。15は復元口径12.4cmを測る。底部から内弯気味に外上方にのびる。

16~20は瓦器椀である。16は復元口径11.6cmを測る。口縁部内面に 2条のミガキを施す。17は復元口径11.8cmを測る。内弯気味に外上方にのびる。18は復元高台径5.4cm、高台高0.5cmを測る。断面形状は細い三角形である。19は復元高台径5.8cm、高台高0.5cmを測る。断面形状は三角形である。20は復元高台径4.8cm、高台高0.2cmを測る。断面形状は低い台形である。29・30は瓦器椀底部である。

第5層出土遺物

21は須恵器坏底部である。復元高台径7.6cm、高台高0.5cmを測る。高台端部は外方に肥厚する。 22~24は須恵器甕である。22は復元口径不明。器厚0.8cmを測る。口縁部は短く拡張する。口 頸部は外反気味に外上方にのびる。23・24の口頸部は内外面とも横ナデ、体部内面はタタキを施 す。

第 4 章 ま と め

調査地は大きく攪乱をうけていたものの、遺構、遺物包含層ともに良好に存在していた。

調査地は谷状の地形になっており、北西方向(海側)に向かって流れていた自然流路 SD-301の存在を確認した。SD-301は次第に土砂の堆積が始まり、川筋を変えながら、奈良時代ごろにはSD-202の川幅まで縮小していく。SD-202に平行するSD-205がつくられる。この溝は直接的につくられており、農業用水路として利用されていたと考えられる。SD-205の埋土が砂・粗砂堆積であることから、短期間に埋没した。おそらくSD-202よりも早くSD-205が埋没し、やがて灰黄褐色粘質土(SX-202)が堆積し始める。SD-202の堆積を細かい白色砂の混じり具合で上下層にわけることができた。白色砂が混じらない下層が堆積した後に白色砂が混じる灰黄褐色土が流れ込み、SD-202は埋没したと推測される。埋没時期は中世前半ごろと考えられる。その後はSX-203も含めた範囲で湿地状になっていたと考えられる。

調査区のほぼ全域で牛の足跡を検出した。足跡の埋土は第 5 層上面より踏み込まれたものである。第 5 層上面で遺構を検出できなかったが、おそらく第 $4 \cdot 5$ 層各上面は耕作地として利用されていたと推測される。調査区北側で検出した鋤溝は第 4 層の色調・質から第 4 層の堆積土と調査区中央で検出した鋤溝の色調は異なるが、質的に第 5 層とそれぞれ対応すると考えられる。この湿地は牛を使った開墾がすすめられ、中世・近世を通じて耕作地が営まれていたと考えられる。埋没した 5 D-301の北側で 5 D-201がつくられる。この溝は 5 D-205同様直線的につくられており、農業用水路として利用されていたのであろう。

沢城跡では以前に数度の発掘調査を行っており、今回の成果と含めてまとめたい。

昭和60年度に本調査区の西隣地で調査を行っている。成果は重複する 3条の溝を含む計 5条の溝を検出した。このうち本調査区検出のSD-202 & SD-1 もしくはSD-2、SD-201 & SD-4 がそれぞれ対応すると考えられる。SD-2 はSD-1 により切られているものの、幅1. $2\sim2.5$ m、深さ約0.3mを測る。溝の肩部はかなり崩れた状態で検出した。SD-1 は幅 $1.7\sim2.5$ m、深さ $0.2\sim0.3$ mを測る。埋土は茶褐色シルト~灰黄色シルトである。SD-202 & 2世土での確認はできなかったが、位置、方向が一致する。 $SD-1 \cdot 2$ は 3条の溝が重複する。

順次 SD-3、SD-2、SD-1と新しくなる。SD-3の流水方向はSD-1・2が南東より北西方向に流れるのに対し、若干、東側より西側に向かって流れている。本調査区ではSD-3に対応する溝は確認できなかった。SD-201とSD-4は位置、方向が一致する。SD-201の方向は北西から北北西に向きを変えるようである。

平成3年度に本調査区の南約50mの位置で掘立柱建物、溝、鋤溝を検出した。掘立柱建物SB—1は梁行2間(2m)、桁行2間以上。掘方は直径0.3~0.4mを測る。時期は不明である。溝SD—1・4は幅0.2mを測り、北東方向に向かう。鋤溝は南北方向と東西方向のものが直行する。南北方向のものが新しい時期である。中世の遺物が出土した。

昭和62年度に本調査の南西約100mの位置で掘立柱建物、溝を検出した。掘立柱建物SB-1 は梁間2間(4.05m)以上、桁行5間(10.25m)である。棟方向は座標北に対して西へ44°振 る。黒色土器A類椀、瓦器椀が出土した。廃棄時期は11世紀と考えられる。掘立柱建物SB—2 は庇付の建物である。梁行 4 間(7.55m)、桁行 5 間(10.5m)である。棟方向は座標北に対し て西へ66°振る。瓦器椀、土師器小皿が出土した。廃棄時期は13世紀である。

溝SD―5は幅1~4m、深さ約0.05mを測る。断面はレンズ状を呈す。西北西~東南東方向 に通る。本溝を切りSB―2が建てられている。瓦器椀・小皿、土師器小皿が出土した。埋没時 期は13世紀である。

沢遺跡で平成61年度に本調査区の西約200mの位置で掘立柱建物、溝を検出した。掘立柱建物 SB―1は桁行3間(約3.9m)、梁行2間(約2.6m)を測る。時期は奈良時代と考えられる。 溝SD―1は幅約0.8m、深さ0.1~0.3mを測る。水流方向は南南東より北北東に向く。溝自体が 浅いこともあり、南側部分は中世の時期に削平され消滅したと考えられる。時期は奈良時代と考 えられる。

沢遺跡・沢城跡で奈良時代の集落が検出されている。また加治・神前・畠中遺跡でも同時代の 集落が検出されている。この二つの地域で小規模な開発が行われていたと考えられる。沢地域で は平安・鎌倉時代の集落が検出されていることから、開発、耕作が引き続き行われていた。貝塚 の各地域で本格的に開発が行われるのは、12~13世紀以降と考えられ、沢地域の各遺跡の多くも 耕作地跡が検出される。

沢地域の開発は貝塚市域では比較的早い段階で行われている。貝塚市域やその周辺では、年間 降水量が少なく、河川も短いため、灌漑に適した河川ではない。そのため用水手段としてため池。 の築造が行われている。今日でも多くのため池が存在し、利用されている。ため池の築造は大規 模な土木工事であり、費用と労力は莫大なものであった。沢地域のこれまで検出された奈良~平 安時代の集落の状況を考えるとため池の築造は考え難く、今回の調査で検出した近木川から派生 したと考えられる流路を利用して耕作を行っていたのであろう。

参考文献

(1) 貝塚市教育委員会 埋蔵文化財調査報告第11集 『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅲ』1986

(2) 貝塚市教育委員会 埋蔵文化財調査報告第16集 『貝塚市遺跡群発掘調査概要V』1988

(3) 貝塚市教育委員会 埋蔵文化財調査報告第24集 『貝塚市遺跡群発掘調査概要 X IV』1992

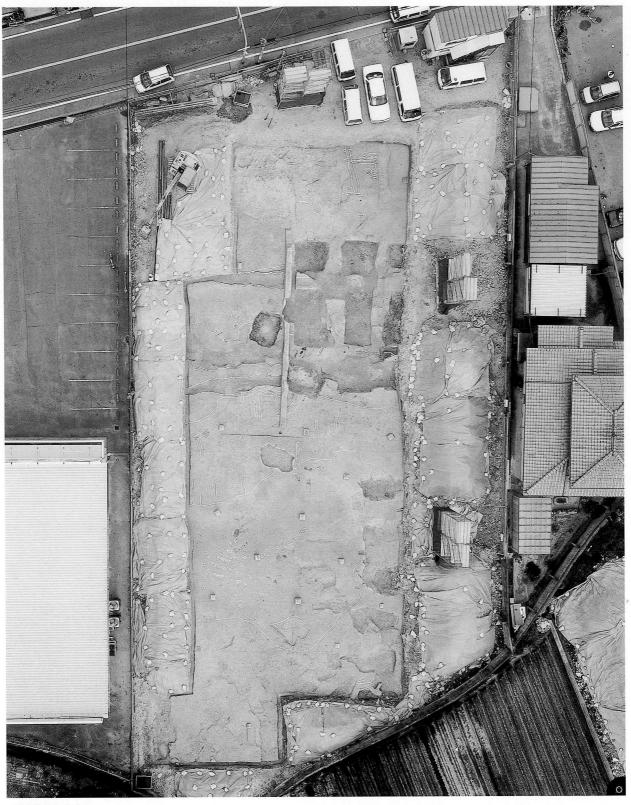
(4) 貝塚市教育委員会 埋蔵文化財調査報告第14集 『貝塚市遺跡群発掘調査概要IX』1987

報告書抄録

報告書抄録											
ふりが	な さわじょう	あとはつく	くつちょう	さがいよ	う						
<u></u>	名 沢城跡発	掘調査概	要								
副書	名										
巻	火		Test also dett d								
シリーズ			調査報告	Ē			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·				
シリーズ	番第51集										
	名木嶋崇晴	木嶋崇晴									
	對 貝塚市教	貝塚市教育委員会									
		597-8585大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号TEL0724(23)2151									
<u>発行年月</u>	西暦1999年 3月 31日										
ふりがな	ふりがな	コ	ード	北緯	東経		調査面積	調査原因			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	F		調査期間	m²				
さわじょうあと	おおさかふ	27208		34度	135度	1998年	875	共同住宅			
沢城跡	大阪府			30分		10月19日~		建設			
,,,,	かいづかし					1999年					
1	貝塚市					1月13日					
	うらた										
	浦田							1			
							-				
								1			
							•	1			
1											
				1							
1.											
		A SECTION AND A SECTION ASSESSMENT ASSESSMENT ASSESSMENT ASSESSMENT ASSESSMENT ASSESSMENT ASSESSMENT ASSESSMENT									
ふりがな						•		ł			
所収遺跡名	種別	主な	時代	主な遺	構	主な遺	物	特記事項			
さわじょうあと	•										
沢城跡	城跡		世	鋤 溝 溝	:	土師器					
,	集落跡	:			.	須恵器 瓦器 陶磁器					
1					格						
			1								
1											
					ł						
		ŀ						. ,			
					-						
					l						
								1			
	l						l				

図

版



調査区全景



1. 第1遺構面全景

北より



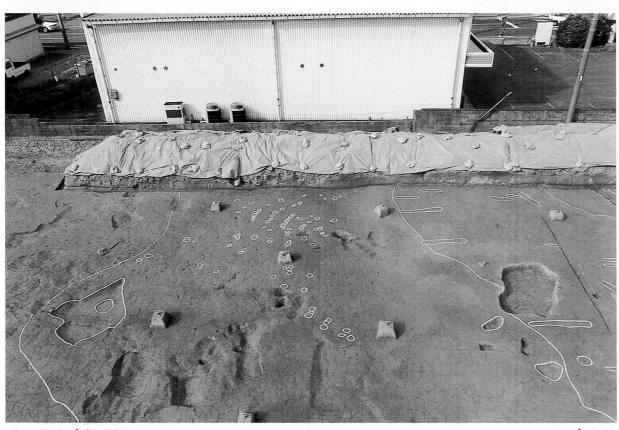
2. 鋤溝検出状況

東より



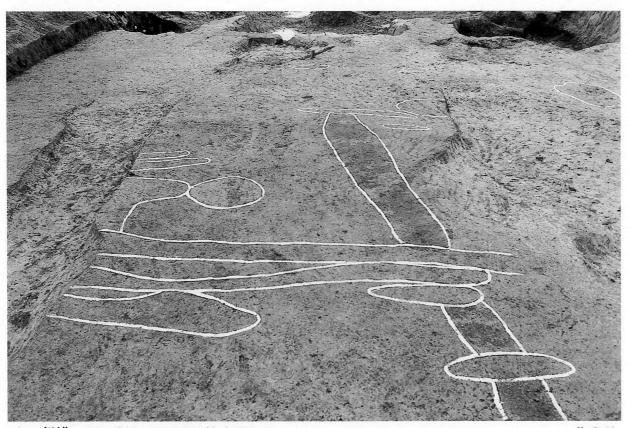
1. SX-203検出状況

東より



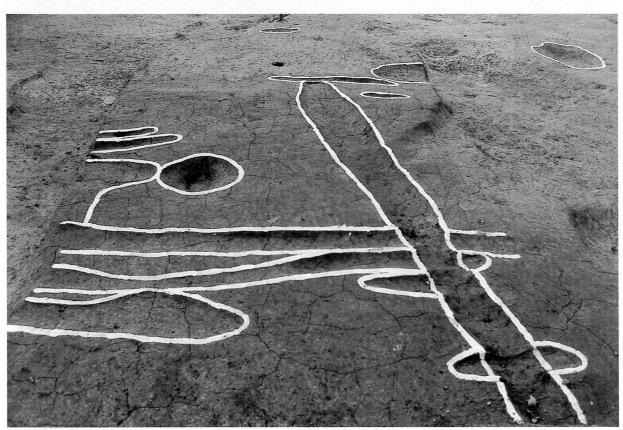
2. 同上完掘状況

東より



1. 鋤溝、SD-214、SX-213検出状況

北より



2. 同上完掘状況

北より



1. 第2遺構面全景

北より



2. SX-202検出状況

東より



1. SD-201 • 202 • 205 • 208検出状況

北より



2. 同上完掘状況

北より



1. SD-201 • 202 • 205 • 208 検出状況

東より



2. 同上完掘状況

東より



1. SD-201 · 208検出状況

西より



2. 同上完掘状況

西より



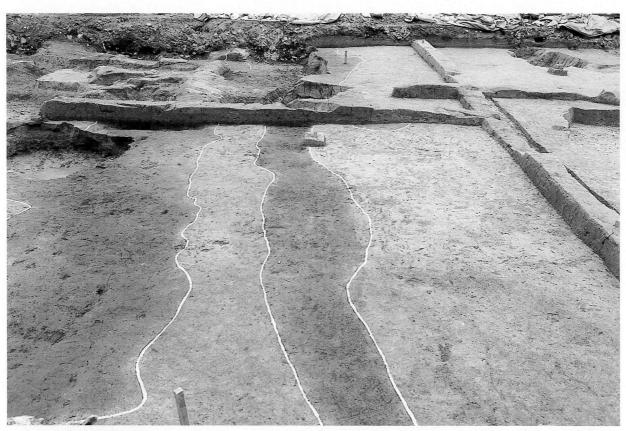
1. SD-202検出状況

西より



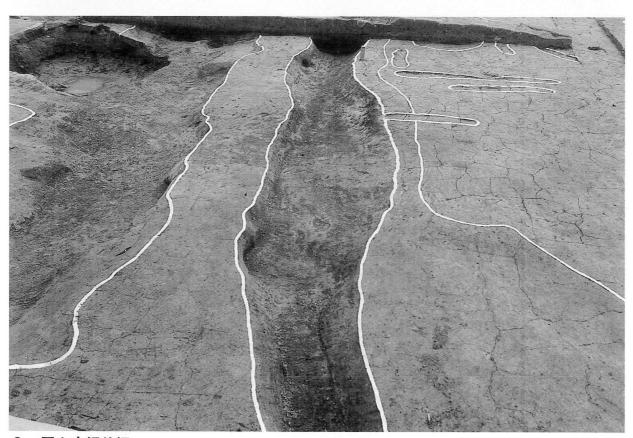
2. 同上完掘状況

西より



1. SD-205検出状況

西より



2. 同上完掘状況

西より



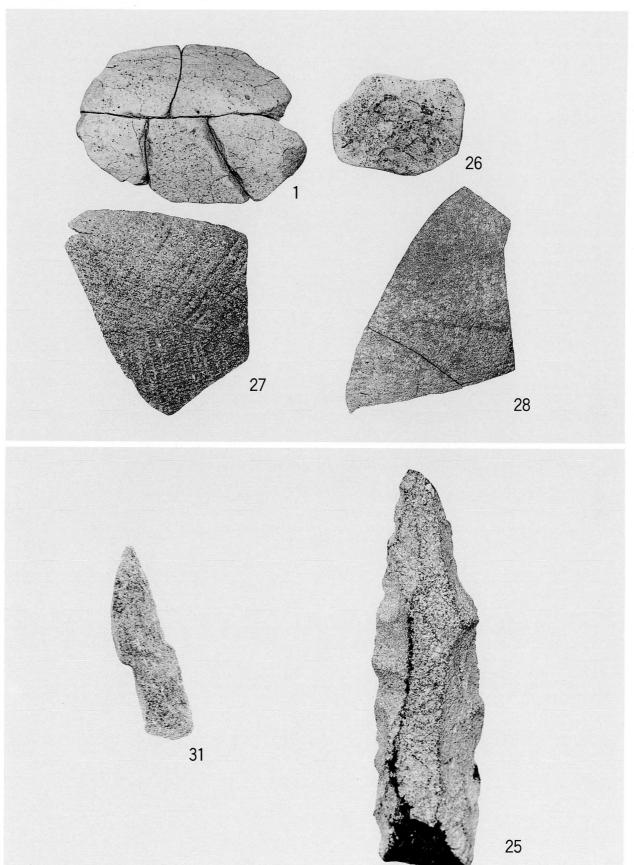
1. SD-301完掘状況

北より

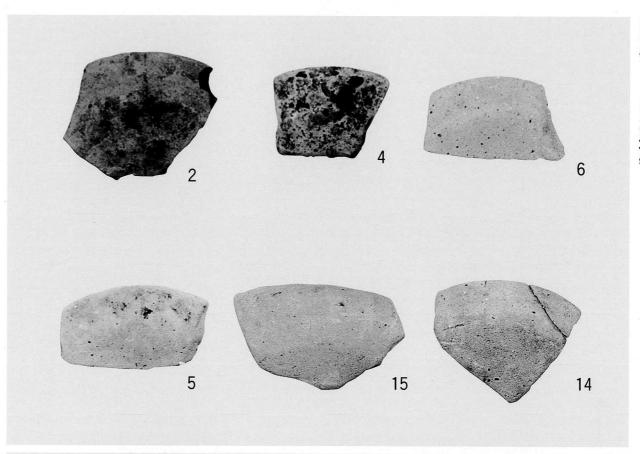


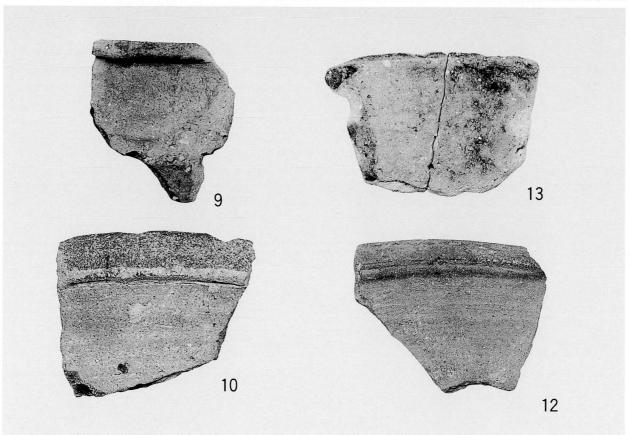
2. 同上

東より

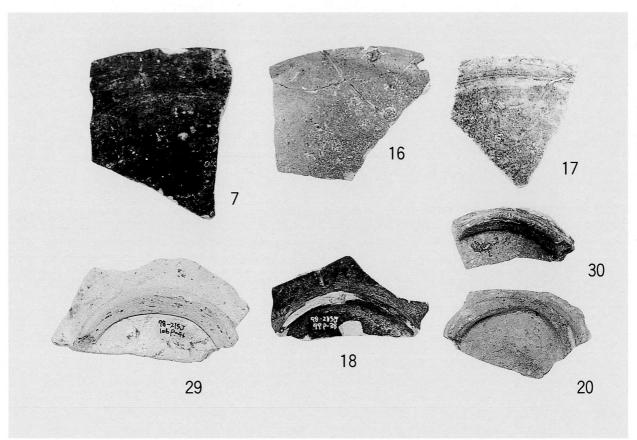


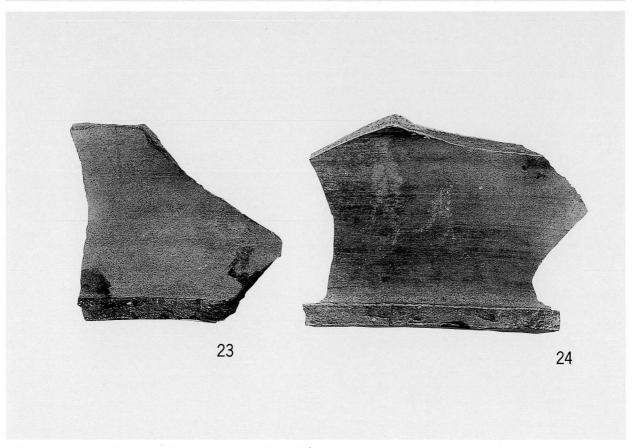
SD-202 (1、26~28)、SX-202 (25) SX-203 (31)





第2層(2)、第3層(4、6、9、10、12、13) 第4層(5、14、15)





第3層(7)、第4層(16~18、20、29、30)第5層(23、24)

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第51集

沢城跡発掘調査概要

発 行 日 平成11年3月31日

編集•発行 貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中1-17-1

印刷 摄河泉文庫